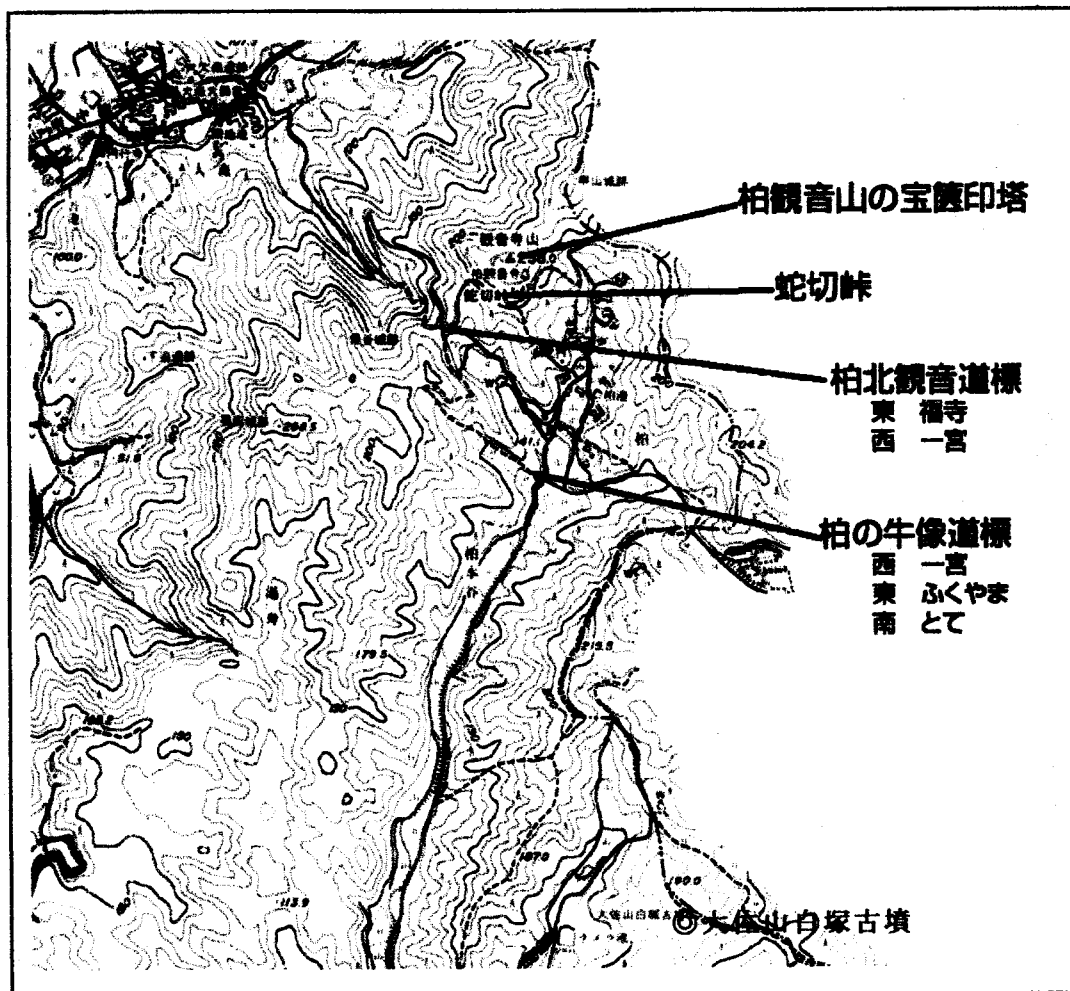


野呂往還を歩く

講師 備陽史探訪の会会長 田口義之



野呂往還とは、神石郡の坂瀬川から新市町の戸手までの尾根道で、昭和 30 年代まで使われていました。「野呂」はなだらかな尾根を意味する言葉で、尾根道を指す普通名詞だとも言われています。

スケジュール

- ◎8 時半 戸手駅前発 (大佐山白塚古墳群、柏甲山城見学)
- 正午頃 柏観音堂で昼食(野呂往還の探索、大坊福盛寺参拝)
- ◎16 時頃 戸手駅にて解散(戸手駅発 16 時 22 発上り電車に乗車予定)

注意事項

狩猟解禁時期に入っています。単独行動は慎んでください。

ごみは各自でお持ち帰りください

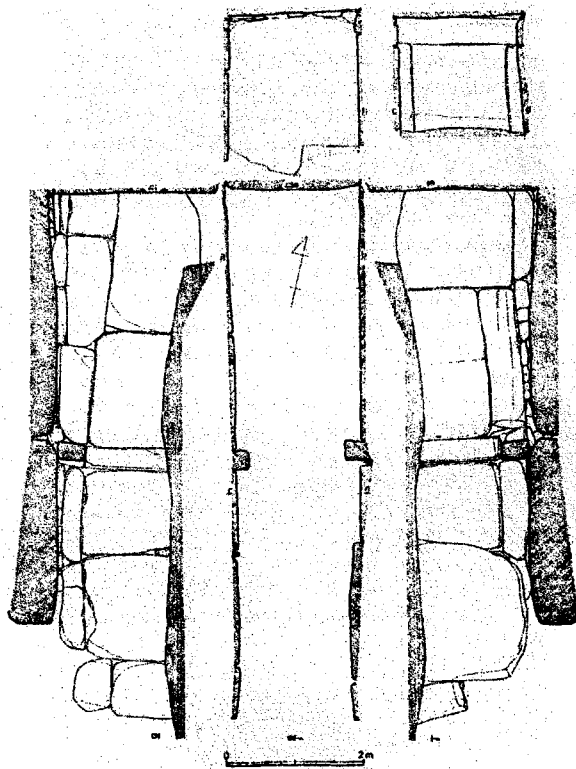
大佐山白塚古墳（福山市新市町戸手）

全部で七基から構成される大佐山古墳群の中では、最大の古墳で、古墳の裾部前面には張り石状石列が直線的に並ぶことから、1辺が12m、高さ4mの方墳と考えられている。

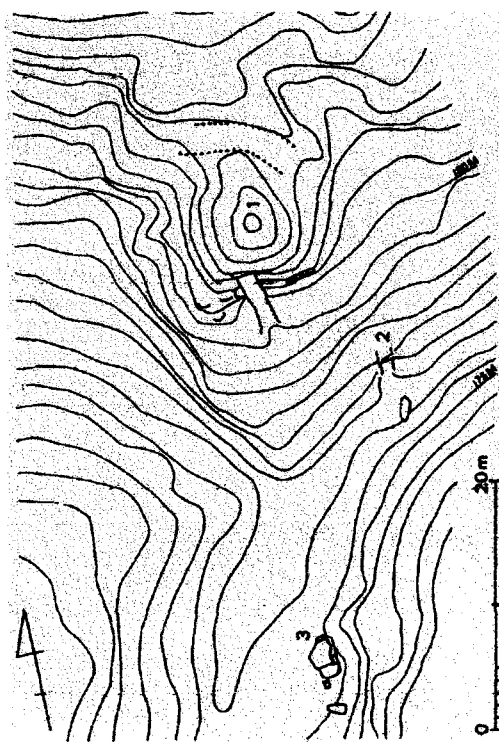
内部主体は、南向きに開口した全長7.8m、幅1.8m、高さ2.3mの横穴式石室である。表面を平らに加工した大形の花崗岩を用いているが、石室中央の両壁には鴨居状に石柱が立てられており、その上には横石が架け渡されている。このため、石室が石柱により羨道部分と玄室部分に二等分されているのが特徴である。石と石とのすき間には漆喰が見られ、名前の「白塚」から、かつては壁面全体に漆喰を塗っていたと推定される。横穴式石室の形状をとどめているものの、形態的には横口式石槨を志向していることから、古墳時代終末期の七世紀でも前半に築造されたと考えられる。

南の尾根筋上に横穴式石室を内部主体とする、小規模の古墳が6基分布している。いずれも、丁寧なつくりの石室であるが、横口式石槨というよりは、横穴式石室としての空間の広さを感じさせる古墳ばかりであり、漆喰の使用は認められない。

古墳時代終末期の古墳は、単独で築かれていることが多いにもかかわらず、この大佐山白塚古墳は、古墳群を形成している。終末期古墳の被葬者として中央の王族や官人などをあてる説があるものの、ここでは地元の有力豪族たちを考えるべきである。



石室平面図（芸備より）



地形測量図（同）

柏城跡 (新市町下安井)

官氏惣領筋の一つ、官下野家の拠点であった「柏村」が史上に現れるのは、応仁の乱中の文明三（一四七一）年のことである。備後の応仁の乱は、東軍に属した守護の山名是豊に対する西軍方国人衆の反抗と言う構図で戦われたが、東西両軍の合戦で最初に激戦となったのがここ柏村の合戦であった。

合戦は足掛け三年に及んだ。官氏は善戦したが、備中の庄伊豆守、備前の松田彦次郎、安芸の毛利・小早川氏など、名だたる諸将がこぞって東軍の山名是豊に味方したため、官氏の敗北に終わった。この時、惣領の下野守教元をはじめ主だった者は詰腹を切らされたと伝え、観音堂山には官氏のものと考えられる寶篋印塔が残っている。

その後、柏村が歴史の表舞台に登場するのは、永正18（1521）のことである。この年備後は山陰から南下した尼子氏の軍勢が大きく動き、国内が蜂の巣をつついたような状態となったが、官氏の拠点「柏村」も攻撃を受け、被官の小奴可又次郎や栗根助七が戦功を挙げ、官政盛、同親忠から感状を受けている。官氏の惣領家は天文10年（1541）、断絶して滅ぶが、この頃まで柏の城は機能していたと考えられる。

城跡の中心にあたる観音堂山は山頂のすぐそばまで車で行け、見学しやすい。山頂には先に紹介した戦乱で滅んだ官一族のものと考えられる寶篋印塔があり、数段の郭跡も見られる。ここから尾根伝いに東北に行けば、「西備名区」に柏谷甲山城として紹介されている甲山城跡で、尾根上に六箇所の郭が連続して築かれている。

